
勇者物語

モノクロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者物語

【Nコード】

N3886BA

【作者名】

モノクロ

【あらすじ】

現実世界から異世界に魔王討伐のための勇者として召喚されてしまった普通の男の物語である。

処女作なので変な部分もあるかもしれませんがご注意ください。

徐々に文章量を増やしていきます。

勇者物語？（前書き）

駄文にお付き合いください

勇者物語？

「おはよう、母さん」

俺の1日は、何時もこうやって始まる。

「おはよう、ユウ。早くご飯たべなさい、学校に遅れるわよ」

「はいはい。毎日毎日同じこと言わなくてもわかってるって」

これまでも毎日同じようなことを繰り返し、これからも繰り返されると俺は漠然と考えていた。

しかし、そんなことはなかった。

「ごちそうさま、母さんそれじゃあ学校いってくるよ」

「いつてらっしやい、忘れ物してない？」

「してないよ、じゃいつてきます。」

そう、まさかドアを開けたら、光の塊のようなものに包まれるなんて想像できるわけない。

勇者物語？（後書き）

お付き合いいただきありがとうございますっ

勇者物語？改（前書き）

駄文にお付き合いください

改訂しました

勇者物語？改

光の塊が消えると周囲の光景は自分が見知ったものではなく、周囲には映画で見たことがあるような姿をした

【騎士甲冑を来た人たち】、

【黒いフードを纏っている魔法使いのような人たち】

が自分を取り囲み正面には、騎士甲冑を来た人を左右に従え右手に【光輝く剣】を持ち金の髪に髪と同色の髭を生やし豪華絢爛な装飾を施した服を着た

【王のような人】がいた。

「ここはどこですかっ」

「ようこそ勇者よ、我が城へ」

「ゆ、勇者？だ誰がですか」

「それはお主のことだ。お主は魔王討伐するための勇者としてこの聖剣に選ばれここに召喚されたのだ」

【王のような人】が右手に持っていた【光輝く剣】を掲げた。

は？勇者？魔王討伐？聖剣？召喚？

意味がわからない、いや意味はわかるが理解したくないっ

「俺はただの高校生だ！勇者や魔王討伐ってどういうことだよ！？それに召喚されたって俺は家に帰れるのか！！説明しろよ！！」

「貴様っ！王に向かいそのような口を利いてもよいと思っているの

か！！不敬であるぞ！！」

【王のような人】の右に立っていた人が叫んだ

「良い、フェルム騎士団長。勇者は召喚されたばかりで戸惑っているのだらう、勇者よお主の疑問は魔術師リルナに問うが良い」

「魔術師リルナ？」

「うむ、リルナは我が国でも屈指の実力者お主の疑問に全て答えてくれるだらう。」

「話の続きはお主の身に起こったことを理解してからにしよう」

【魔術師リルナ】その人なら何が起こっているか教えてくれるのか？

「その人は何処にいるん…」

その時、ゾクツと寒気を感じた。

騎士団長と呼ばれた女性が俺を睨んでいた。

「…ですか？」

「フェルム騎士団長に案内させよう、フェルム騎士団長構わぬな」

「了解しました。では勇者ついてこい」

そして、俺の前までやって来た。離れていたから解らなかったが、フェルム騎士団長と呼ばれた女性はとても綺麗だった。肩口で揃えられた銀色の髪に勝ち気な深緑の瞳その瞳に見られ、俺は見惚れていた

「何をしている、置いていくぞ」

「あ、ああわかった」

「では、勇者を魔術師の元まで案内して参ります。」

王がいた場所を出て騎士団長と共に歩き出した。騎士団長は俺のこ
とを歩きながら見ていた。

「なんだよ」

「貴様のような剣を握ったこともないような者が勇者に選ばれるな
ど理解出来ぬと思っただけだ」

「何で俺のこと何にも知らないのに剣を握ったことがないって解る
んだよ」

「貴様の立ち振舞いを見ればわかる…貴様のような存在がなぜレン
ティスに選ばれたのか理解できぬな」

「レンティスって何だよ?」「気になるならリルナに聞け、もうつ
いたぞ」

「えっ」

気付けば目の前に木製の扉があった。

「リルナはこの中にいる中に入り貴様の疑問を問うがいい」

「フェルムは入らないのかよ?」

名を呼んだ瞬間、首に剣を突きつけられた。

「な、なんだよ」

「ほう、剣を突きつけられて腰を抜かさぬか、大抵の奴なら腰を抜かすか悲鳴をあげるものを、どうやら見込みはあるようだな」

「は？」

「一度しか言わぬからよく聞け我が名を呼んで良いのは私が認めただけのみだ。私の名を呼びたくば私に認めさせるのだな貴様のことを」

「わかったよ、あと俺の名前は貴様じゃなく「貴様の名に興味はない私に呼んでほしくば私に認めさせることだ」

「わかった。それで騎士団長は入らないのか？」

「私は魔術師という奴らが好かん、力があるのは認めるが正々堂々と戦わぬからな」

「そうか、じゃあどうするんだ？」

「話が終わるまでここで待っている、早くいけ」そして俺は木製の扉を開けた。

勇者物語？改（後書き）

駄文にお付き合いいただきありがとうございます。

勇者物語？改（前書き）

改訂しました。

駄文にお付き合いください。

勇者物語？改

扉の向こうは、本だらけだった辺り一面本が山住になっている。

「魔術師のリルナさん？リルナさん！どこですかー！」

本の山の1部が崩れ声が聞こえてきた。

「はいい〜リルナはここですう〜手を貸してくださいい〜」

本の山から気が抜けるような間延びした声が助けを求めてきた。

手が出てる方に俺は本を退けて手の元にたどり着きその手の主を山から引きずりだした。

その主は薄い紫色の長髪をして顔は髪に隠れて見えなかった。

「本に埋もれてどうしたんですか？」

「本を読んでたらあ〜いきなり本が崩れてきてえ〜埋もれたんです
う〜ところでえ〜あなた確か勇者さんとして喚ばれた方ですよねえ
」

「勇者になつたつもりはないですよ。」

「されについきなり、お前は勇者だとか、魔王討伐しろだとか！言
われても、意味がわからない！！」

「ふえ〜怒鳴らないで落ち着いてくださいい〜」

「あつすみません、話していると自分に降りかかったことに腹が立つ
てしまって、あれ？でもなんで俺が喚ばれたってわかったんですか
？」

「ああ〜それはですねえ〜これのお陰なんです〜」

そして彼女は本の中に手を入れて、手と同じ大きさの鏡を取り出した。

「これはですねえ〜持ち主が見たいと思ったあ〜光景を見せてくれるんです〜さらにい〜声まで聞こえる優れものです〜だからあなたがどうしてここに来たのかもわかってます〜」

「だったら、教えてください！俺は家に帰ることができるんですか
!!!」

「すみません〜リルナにはあなたを帰す方法がわかりません〜」

「そ、それは…もう家に…帰れな〜いいえ〜帰れますよ」

「あなたは〜レンティスに喚ばれてえ〜ここに存在してるんです〜」

「それってどういうことですか？それに、レンティスって何ですか？」

「レンティスは聖剣です〜王さまがあ〜持ってたやつです〜」

俺は【王】が持ってた【光輝く剣】を思い出した

「あの光輝やいてた剣ですか？」

「やっぱり光って見えたんですかあ〜」

そのとき、彼女の薄い紫色の髪に隠れた瞳が見えた、彼女の髪と同じく薄い紫色をしてその瞳は喜びに満ちているようにかんじられた。
「それってどういう?」

彼女は本の山を漁りある本を俺に満面の笑みを浮かべ差し出した。
「リルナ達には聖剣はただの綺麗な剣にしか見えませんよお。この本【聖剣レンティスの伝説】のここ読んでみてくださいいいい」
彼女はあゝ一文を俺に指差して見せた。

「【聖剣レンティスに選ばれし者には聖剣の加護が与えられる】」

「これがその聖剣が輝やいて見えたことに関係あるんですか？」

「ありますよお。なぜならあゝかつて存在した勇者は聖剣が輝いて見えるといつていましたからあゝ」

「昔も勇者がいたのか！！？？」

「はいいゝいましたよお」

「その勇者はどうなっただんだ！！？？」

「わかりません。記録では魔王討伐後に消えてしまいましたが、さうですからあゝ」

「消えた？元の世界に帰ったのか？」

「おそらく。だからあなたも魔王を討伐すれば帰れますよお」

「そ、そんなの無理だ！俺はただの人間だぞっ！」

俺はただの高校生の人間なのに魔王なんて倒せるわけない！

「違いますよお。あなたは这个世界においてはただの人間ではありませんよお。さらに聖剣の加護もありますしいい」

「この世界ではただの人間じゃないってどういう意味だよ？それに加護があるって何でわかるんだ？」

「あなたは上位世界の人間ですからねえ。加護があるのがわかるのはこの【聖剣レンティスの伝説】が読めたからです。」
「だから意味が」まずはあゝ！！加護について説明しますねえ。それまでは疑問が有っても話が終わるまで黙っててくださいねえ。」

今の彼女には有無言わせね迫力があつた

「あつああ…わかつた」

俺の言葉を聞き彼女は満足そくに頷き、

「では説明しますねえ。よく聞いてくださいよあ。」

勇者物語？改（後書き）

駄文にお付き合いいただきありがとうございます。

勇者物語？（前書き）

ヨロシクお願いします〜

今回は説明会です〜

勇者物語？

「それではあゝ、聖剣の加護について説明しますねえ」

「まあずうゝあなたが聖剣の加護を持っていると確信したのわあゝこの本が読めたことにありますう」

彼女は俺に【聖剣レンティスの伝説】を見せた

「この本の題名はなんて読めますかあ」

「は？何って【聖剣レンティスの伝説】だろ？」

すると彼女は満面の笑みを浮かべ

「はいいゝそうですがあゝこの本は古代語で書かれてるのでえゝことは違つ世界から来たあゝあなたが読めるはずがないのですう」

古代語？どういうことだ？だって日本語で書かれてるのに

俺がそのことを尋ねようとすると彼女が話し出した

「さらにいゝ言語もあゝ違つはずですよゝな・の・にいゝ会話が出来てますう」

「ここでえゝ聖剣の加護の話にもどりますう」

「聖剣の加護とはあゝ厳密に言えばあゝ世界からの加護でもあるんですう」

世界？何故、聖剣の加護が世界からの加護になるんだ？

「疑問そうですねゝではその疑問にお答えしましょうう」

「実はあゝ聖剣レンティスはあゝ人間が作ったものではなくうゝ人間のおゝある感情を集めて世界が創り出したものなのですう」

人が作ったものではなく世界が創った剣かある感情っていったい？

「その感情とはあゝ希望やあゝ愛情、友情といった正の感情ですう」

「ちなみにいゝレンティスとはこの世界の古代の言葉で【希望】を意味しますう」

「だからあゝ聖剣の加護はあゝ世界の加護といつても良いのですう」

「その加護のあゝ対象者はあゝこの世界の全てのこ【この世界の全てのこと】で優遇【かあ

「一つ質問があるんだか？【全てのこと】で優遇【って戦いでも優遇されるのか？」

もし優遇されるなら魔王と戦うことになっても討伐出来るかもしれない

「されますよあゝでも何もしなければ、意味がないですがあゝ」

「どづいつことだ？」

「例えばあゝ加護の無い人が剣について学んで騎士になるには平均、数年ゝ数十年かかりますう」

「しかしいゝ加護を持ち上位世界の人間であるあなたならあゝ数ヶ月で騎士になれるはずですよ」

「要するにいゝ努力すればするだけえゝ報われるということですよ」

なるほど、そういうことかあ
しかしまた、上位世界かどうということなんだろう？
それにそんな加護があるならこの世界の人間が魔王を討伐できるんじゃないのか？

「なあ、そんな加護があるなら俺じゃなくても良かったんじゃないか？」

「聖剣の担い手つまり勇者になる資格がある方は確かにいますよあゝ騎士団長フェルムさんとかあゝ」

「だったら！」

俺じゃなくても「勇者となり聖剣の加護を手に入れ魔王に挑んだ人は【初代魔王】のときにいましたあゝ」

「でもあゝ【初代魔王】には勝てませんでしたあゝだから、別世界、上位世界の人間で聖剣の担い手になれる人を召喚したんですあゝ」

「それに魔王は何人もいたのか？」

「いいえあゝ魔王は初代と今の2代目だけですあゝ」

あれ？

「だったら何で今さら、魔王を討伐するんだ？」

初代の時を古代って言ってたからかなり昔のことだよな？」

「簡単ですよあゝ魔王が人間の領土を侵略してきたからですあゝ」

「今までは、魔王以外の魔族や魔獣が攻めてくることはありませんがあゝ最近、魔王軍が攻めてくることで発生してしまったから

聖剣の担い手たる勇者を召喚したんです。」

「そうだったのか、でも人間の軍で魔王は倒せないのか？」

「魔族や魔獣は倒せますが、魔王を倒せるのは聖剣の担い手たる勇者だけなのです。」

「さらに、魔王は自分の城から出ないし、周囲は魔獣だらけで、人間の軍を大量に勇者と共に送ることができないのですよ。」

「だから、勇者は少数精鋭で魔王に挑む必要があるんですよ。」

「理解出来ましたね。」

「次に上位世界について説明しますね。」

勇者物語？（後書き）

駄文にお付き合いいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3886ba/>

勇者物語

2012年1月13日01時08分発行